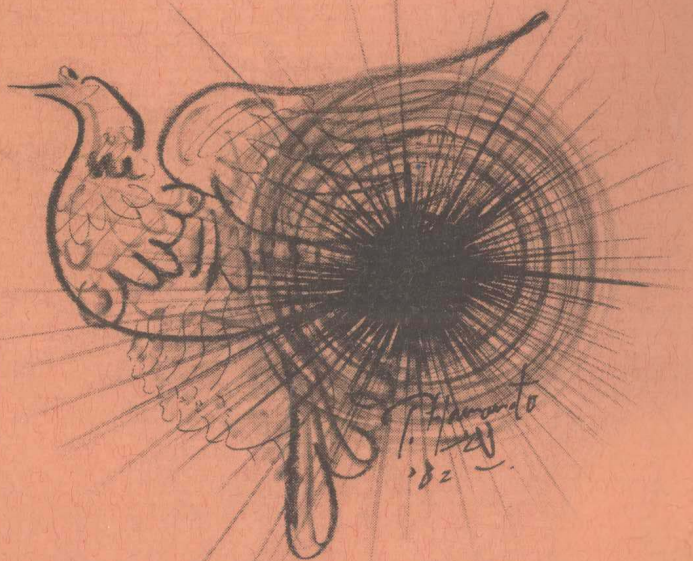


反核詩集

核時代の童話

栗原貞子



栗 原 貞 子 (くりはら さだこ)

1913年 広島に生まれる。
1945年 広島で被爆。
1946年 3月 「中国文化」原子爆弾特集号を編集

著 書 どきゅめんと「ヒロシマ24年」(社会新報社)
ヒロシマの原風景を抱いて (未 来 社)
核、天皇、被爆者 (三一書房)
詩集 ヒロシマというとき (三一書房)
私は広島を証言する (詩集刊行の会)
未来はここから始まる (詩集刊行の会)
核時代に生きる (三一書房)

詩 集 核 時 代 の 童 話

定価 400円 送料 200円

第一刷 1982 年 3 月 21 日
第二刷 1982 年 12 月 8 日

著 者 栗 原 貞 子

発 行 所 詩 集 刊 行 の 会

広島市安佐南区祇園町長束855-2
電 話 (082) 2 3 9 - 3 9 9 2
振 替 広 島 0 - 1 8 8 1 5 番

印 刷 所 西 日 本 印 刷 株 式 会 社

広島市安佐南区祇園町長束147

四分前の時計がゼロタイムになり

世界中に青い閃光が連鎖して

なだれ落ちる太陽。

その時がくる前に

核をあやつる死の神々を

追い落そう。

〈ベラウの海の白い貝〉

..... 5

ベラウの海の白い貝..... 6

ちえおくれの子らのヒロシマ..... 7

幼いものの声..... 9

被曝..... 10

鳥..... 12

マンモス団地..... 13

祭..... 14

〈核時代の童話〉

..... 15

王様の耳はロバの耳..... 16

黄金と核..... 17

ヒロシマと裸の王様..... 19

裸の王様..... 20

〈アメリカは何でも世界一番〉

..... 22

アメリカは何でも世界一番..... 23

燃えるヒロシマ、ナガサキ、ハリスバーグ..... 24

タダノリ論..... 26

〈原子地獄の救済〉

..... 28

原子地獄の救済..... 29

〈パンと薔薇を〉

..... 33

ヤスクニ..... 30
戦争遺児..... 31

パンと薔薇を..... 34

三月・ヒロシマから..... 35

異形..... 36

〈わが悼みうた〉

..... 37

射程距離..... 38

昇天..... 38

終りのとき..... 39

知らなかった..... 40

呼ぶ..... 41

空席..... 42

献詩..... 43

〈平和教育の教材としての五編〉

..... 46

原爆で死んだ幸子さん..... 46

折づる..... 49

生ましめんな..... 50

私は広島を証言する..... 52

〈既刊誌集より〉

	ヒロシマというとき……………	54
	旗……………	56
	ヒロシマ……………	59
	影……………	60
	鳩……………	61
	ピカソの鳩になつて……………	62
	ヒロシマのさくらについて……………	63
	ヒロシマのみどり……………	64
	死んだ少女のこえ……………	65
	アメリカよ自ら滅びるな……………	66
	未来はここから始まる……………	68
	昏い夏……………	71
	人間の証……………	72
	△	
▲解説……………	栗原貞子論……………	74
	吉田欣一……………	
あとがき……………	栗原貞子……………	93

* ベラウの海の白い貝 *

「ベラウの海の白い貝」はハワイの非核太平洋国際会議で会ったベラウ共和国のローマン・ベードルさん（弁護士）が、日本政府の核廃棄物の投棄に抗議して、ベラウの女性たちと来日し、広島市でベラウ・ヒロシマ市民交流集会（八一・七・二六）を持ったとき、ベラウの女性から白い貝をもらい、白い貝のイメージを書いた作品です。

「ちえおくれの子らのヒロシマ」は東京の八王子養護学校の高校生たちが、ヒロシマに修学旅行にきたとき、ホテルでお話したときのことを書きました。親たちは、多額な費用をかけてヒロシマに行っても理解出来ないだろうと反対でした。先生たちは、ちえおくれの子どもでも核時代に生きていることに変わりはない、自分たちの生きている時代がどんな時代か教え、考えさせねばならないと説得してヒロシマ修学旅行が実現しました。

後日、私は生徒の作文をまとめて送ってもらいましたが、彼らは彼らなりに原爆の恐しさを理解したのでした。

「幼いものの声」はフランスとアメリカが同時に核実験を行ったとき、一昨年七月十九日に慰霊碑前で抗議の座りこみをしました。そのとき豊田郡の西野小学校五年生一五人が慰霊碑の前で「原爆ゆるすまじ」を歌いました。その歌ごとに感動して書いた作品です。

「鳥」「マンモス団地」「祭」など直接核にかかわる作品ではないが、現代の乱開発や巨大社会の人間のありようを書いた作品として収めました。

ベラウの海の白い貝

ベラウの海でとれた

白い花びらのような貝。

白いつぼみのような巻貝。

白い貝を私のてのひらにのせてくれた

ベラウの女たち。

白い貝はベラウの海が

エメラルドのように

透きとおり こまかい砂のなかに

白い貝を育てていることを語っている。

こどもたちは 一日中

やさしい波とたわむれ

そのそばを紡錘つづみのような魚が

銀鱗を光らせながら泳いでいる。

みどり色の海草が

夢見るようにゆれている。

そんな海へ放射能のゴミを

棄てようとする日本の侵略者たち。

「ほんとうに安全なのなら

宮城のお濠はうや

東京湾にすてるといいのです」

海は私たちのいのち。

目に見えない異物がまじっていても

私たちの肌は感覚する。

遠い昔から

海に生きた民族だから――。

月の明るい晩

浜辺で男も女も

輪になって 腰をくねらせ

原初のおどりをおどる。

人口一万五千の

月と海の国。

人々は兄妹のように親しく愛しあい

その愛の手で 私たちの手を握り

日本の言葉で挨拶し

日本の言葉で歌をうたう。

ベラウの言葉をうばい

他国の言葉を強制した侵略者たち。

そしていま 核のゴミを

ベラウの海に強制し

侵略の牙をとぐ国。

私たちはその国の国民であることを恥じ

ベラウの海に核のゴミを捨てさせない。

エメラルドの海の

白い貝の絶滅をゆるさない。

ちえおくれの子らのヒロシマ

原爆小頭症ではなく

脳水腫のうすいしゅの巨頭症のこども

眼のつりあがったモンゴリズム。

美しい少女のマリ子さんは

会う人ごとに

「にわとりいますか」

「どんな色」

とはほえみながら質問する。

一語一語 ゆっくり 反芻し

哲学者のようにつぶやく男の子。

ジャングルの獣がおらぶような奇声を

間けつ的に発するだけで

あとは何にも反応しない

離人症の体の大きい男の子。

ねそべってミカンを喰べながら

幸せそうに笑っている少女。

はるばるヒロシマに修学旅行に來た

養護学校の高校生たちだ。

昼間 見学した原爆資料館や

慰靈碑について語る子ら。

「キノコグモが コワカッタ」

「デンシヤが ヤケテイタ」

「ヘイワノヒハ ズットモエテ

イルノカナ」

ちえおくれの子らの

きれぎれな言葉は

暗い脳の襞に刻まれたヒロシマだ。

ちえおくれとは一体何だろう。

ちえの進歩とは何だろう。

マクナマラ計画に参画し

ヒロシマ、ナガサキの三十万人を

灼きころし 今も内部被爆で

苦しめている

アメリカの科学者たちのことだろうか。

複数弾頭、巡航ミサイル、超音速爆撃機

中性子爆弾、音爆弾

互いにきそいあう

死の科学者たちのことだろうか。

死の灰は世界の空をおおい

網のように張りめぐらされた

核兵器工場や原子力発電所から

放射性物質が流出し

捨場のない廃棄物の山が

地球上に築かれる。

野菜やミルクも土壌も水も

汚染されてしまった。

海鳥は死骸になつて渚にうちあげられ
魚も貝も腐臭を放つて波に漂っている。

幼い子らに白血病と

甲状腺癌が多発し

こわれた遺伝子による

先天性障害児の多産。

世界中の母親たちが

おびやかされているとき

ちえおくれの子らは

自らの存在によつて

核文明の

知識公害を撃っている。

一九七九・一〇・一六

幼いものの声

雨は止んだけれども

公園の樹々のみどりは暗く

鳩の群も翼をとじて

芝生の上にうづくまったまま動かない。

鞍型の碑の屋根もぬれ

碑の前の石畳もぬれ

私たちの心も重く沈んでいた。

ムルロアとネバダの二つの実験に

抗議して座っている私たち。

うちわ大鼓の音が

しんしんと鳴り

プラカードが林立する。

爆圧で島の珊瑚礁が陥没し 津波が起きて

幼児やとしよりがさらわれる。

死の灰が降り

白血病や癌にかかった原住民。

内臓がとけた犬が

砂浜で毛皮になつてひからびている。

実験の作業をする原住民は

防護服さえあたえられず

手や足に火傷の水泡ができて発熱する

髪が抜け 斑点が出て使いすてられた。

怒りが沈澱し むなしさになったとき

修学旅行の小学生の一団が

慰霊碑の前にならんで

「原爆ゆるすまじ」をうたった。

沈黙の座りこみ団の

バックミュウジックのように

清らかなうたごえが

梅雨空の下を流れた。

幼いもののなかに根をおろしているもの。

その声よ

私たちの無言歌とともに

フランスにとどけ

アメリカにとどけ

ムルロアに ネバダにとどけ

一九八〇・六・二六・仏米の核実験に抗議して

被 曝

囚人服のような 青い服を着ると

白衣の女が 口を開けさせ

飼育動物に 餌をやるように

チューブの白い薬を押し入れた。

垂直に立った白い台に

胸を押しつけると

レントゲンカメラの

スイッチがカチリと鳴る。

放射線が体の中を通過する。

白い台が前へ倒れると

私はうつ伏せの姿勢になり

左へ向いて 右へ向いて
仰向いて 息を止めてと
命令される。そのたびに
レントゲンカメラのスイッチが鳴り
放射線が体の中を通過する

夏・ 閃光と爆風とともに
受けた放射能の
内部被爆線量は いまいくらだろう。
半減期は過ぎたのだろうか
傷ついた遺伝子 染色体
先天性障害児の
黒い影が通りすぎる。

白い台が後方に倒れると
私は元の位置にかえり
廻れ右すると
前方にも白い台が垂直に立っていて

私は締め木にかけられたように
前後から ぎゅう ぎゅう
押しつけられる。
テレビカメラに監視されながら
大きなコップに入った
へドロのような白い粘液をのむ。

左へ向いて 右へ向いて
息をとめて
そのたびにスイッチがいれられ
体の中を放射線が通過する。

データーは
※ABCのコンピュータに
打ちこまれ
アメリカへ送られるのだろうか。
いまもABCは
被爆者を追いつづけ

山の上から 全市の病院を
見おろしているのだから

一九七七・十二・十二

※ABCⅡ原爆後障害研究所。広島市比治山の
山頂にあり、現在、放射能影響調査研究所（放影研）

鳥

木の葉が色づくころになると

ここだけ開発にとりのこされた

川のほとりの竹やぶに

北の国から鳥族の大群がやって来る。

夜があけると 鳥族は

どこへ飛びたって行くのだろう。

昼間の竹やぶは

にび色の空の下に

暗くしづまりかえっている。

日暮どき 毎日きまった時刻

鳥族はどこからともなく

かえってきて

砂粒ほどの黒い点の大円陣を描いて

竹やぶの上の空を舞い続け

やがて舞い降りて

はるかな団地の電線から

こちらの電線まで

すべての電線を占據し 五線譜を描く。

鳥族の美事な秩序だ。

しかし鳥族にはリードはいないという。

鳥族はふいにとびたつて

囀りながら竹やぶの中に入って行く。

鳥族の大群をのみこんだ竹やぶは

大きく ふくれあがり

さえずりの大合唱で

竹やぶは波のようにゆらいでいる。

囀りがおさまると

灰色の夕暮が川のほとりに立ちこめて
やさしい 夜が 家々を訪づれる。

一九七八・十一・二十三

マンモス団地

いくつもの山を崩して

マンモス団地を造成したとき

巨大なショベルの手が探りあてた

無数の貝塚 石棺や石斧や木の実。

石器時代から核時代の今日まで

地中に埋れていた

遠い 古代人の生の証だ。

人気のない山地で獣や鳥を追ひ

草の根や木の実をとり

海岸へ行って貝を掘り

とぼしい食物をわけあつて

アルカリ性の清浄な血を燃して
愛しあつたのだらうか。

山から谷へ大声で呼びあい

助けを求めあつたのだらうか。

見渡す限り蜂の巣のように

密集する人口三万のマンモス団地。

昼間はゴーストタウンのように

空虚にしづまりかえっている。

朝 石油製品のコーヒーを飲んで

家を出ると

国道は延々何軒 自動車の渋滞だ。

いくつかの ゴー・ストップを

通過して

鳥籠のような家と職場を往復し

家にかえると 電波に送られた

映像の人と向き合つても

隣の人は名さえ知らない。

かつて 古代人たちが

大声で助けを求めあつた近隣の人は

壁一重でも無限に遠い 距離。

何棟何番何号の家に住み

背番号で管理され

団地一統

スタンプで押したような

閉塞した日々が過ぎて行く。

一九七八・一・十

祭

長距離トラックが

ひっきりなしに疾走し

排気ガスが眼にしむ国道の

たちならぶビルの壁にも

裏通りの土着の家の軒から軒へ

団地のアルミサッシュが光る

モルタルの壁から壁へ

祭のしめ縄が張りめぐらされ

風にひらひら白い紙が吹かれている。

国家神道と戦争がどうの

信教の自由がどうのと

目くじらたてる人もない。

地域一統

しめ縄にとりかこまれて

祭の大鼓や笛が

神社の森からひびき

着かざったこどもをつれて

母親たちが歩いている。

いつのまにか町内会が復活し

コミュニティだ

人と人のつながりだと

とりかこまれ 張りめぐらされた

縄のなかで

秋の風に吹かれている

一九七七・十・十五

* 核時代の童話 *

「核時代の童話」は「王様の耳はロバの耳」や「裸の王様」「黄金になったお姫様」などの有名な童話を下敷にして比喩的に書きました。「王様の耳はロバの耳」の「交通事故で死んだ影の兵隊」とは山口県の中谷康子さんの自衛官だった夫のことです。影の兵隊とは憲法違反の自衛隊のことを意味しています。その自衛官だった夫が交通事故で亡くなったのを、山口県の自衛隊の隊友会が勝手に護国神社に祀ったので、キリスト教徒の康子さんや、教会の友だちや、全国の戦争に反対する人たちが支持して、康子さんの夫を「軍神に祀って戦争に利用するな」「信仰の自由を守れ」と裁判をし、夫を軍神でなく人間に返してくれと訴えているのです。

「ヒロシマと裸の王様」はライシャワー元大使など、アメリカ側の証言で、核持ちこみが明らかにされているにもかかわらず、鈴木首相は非核三原則を堅持すると言い、昨年（八一年）八月六日の平和式典に来て、原爆慰霊碑におまじりした時の怒りを書いた作品です。非核三原則の着物を着ているように見せかけても、国民はアメリカの核持ちこみをゆるしている裸の王様であることを見破っているのです。あやまちを犯しながら、「あやまちは犯しません」という碑の前に立つ首相に対しヒロシマの人々は怒り、嘲笑したのです。